

リトル・プリンセス 母の手記 1

※この文書は、以下のサイトより引用し、改行等を手直したものです
http://www.geocities.co.jp/MusicStar/5988/aiwo/aiwo_3.htm

母親の佐藤孝子さんにとって、娘はまさに「リトルプリンセス」だった。幼ない頃から、学校の成績が良く、絵にも詩にも非凡な才能を発揮していた娘は、母親にとっては誇りだった。だが、その反面、傷つきやすい繊細な性格に、ぼんやりとした不安も感じていたという、孝子さんは「娘は中学二年生の時も自殺を図ったことがある」と、この手記の中で告白している。才能に満ちあふれ、それ故、孤独だった娘を持った母親の苦悩と戸惑いが、伝わってくる。

【この章以降の挿入写真は省略いたします。】

娘はなぜ死を選んだのか

佳代の遺書――今でも、あれを遺書とっていいのかどうか私にはわかりませんが――その中に峰岸徹さんの名前がたしかに書かれていました。

峰岸さんが好きだった、と。

何が何だかわからぬまま東京に駆けつけ、佳代を茶毘に付した葬儀場の駐車場で私は初めてその“遺書”を主人に見せられたのです。茶色い封筒にいつもあの子が使っていた可愛らしいキャラクター模様の便箋が二枚入っていました。

べつに誰あてというものでもない。先立つ不孝をお許してくださいというような遺書にふさわしい言葉もありませんでした。あの子の性格からして、もしあれが遺書であるなら、必ず、先に死ぬのごめんなさい、とか一言でも書いているはずです。

一枚には佳代が日頃からよく書いていたような詩が書いてありました。もう一枚に、心境、といっても決して死を予想させるようなものではありませんでしたが――が書いてあった。それもたった十数行のものでした。

もともと主人は技術屋で、日頃から佳代の教育についても、私にまかせきりでした。佳代の書くものについて批評めいたことなど、これまでただの一度も言ったことのない人なのですが、そのとき、ポツリとこう申しました。

「おれたちの子にしては佳代は文才があったんだなあ。おれたちの子にしては出来過ぎた子だった。そういうふうと思うよりしかたないな・・・」

主人の悲しみが、痛いほどわかりました。 私はその後、二度とその“遺書”を目にしていません。峰岸さんとのことについては、女性週刊誌、テレビなどであれこれ取沙汰され、そのたび私は峰岸さんに対して申し訳なく、またお気の毒でなりませんでした。

峰岸さんと佳代の間に子どもができ、すでに妊娠何カ月で、佳代はそのことを苦にして自殺したというような噂まで書きたてたところもありました。

全く根も葉もない話です。こんなことまで書きたくはないのですが、佳代は死ぬ十日程前に、生理用品を買っていたのです。妊娠などということは、だから絶対にあり得ないことなのです。

無理矢理に引っ張り出されたのですが、テレビのインタビューで峰岸さんは『禁じられたマリコ』で二人が共演したときのことを、こうおっしゃっていました。

「ここはどういうふうにしたらいいとか、こっちへ行った方が影がなんとかとか、とにかく彼女は、ぼくに一番質問するんです」

母親の私には実によくわかるのです。

小さいときからあの子はよく質問する子でした。塾というものに行かせたことがなかったから、授業をしっかり聞いていました。そして、とくに好きだった数学などは、毎日、放課後、職員室に押しかけて数学の先生にとことん質問を浴びせる。担任の先生に「お母さん、いっぺん数学の先生にお礼をいってくれないかんよ。毎日、お世話になっとるんだから」と笑われたぐらいです。

あの子は自分が何かしようと思って、わからなかったら徹底的に質問する子なんです。わからないと女の人も男の人も関係ナシになってしまう。峰岸さんは大先輩だし、演技のことやなにかで、いろいろ訊きたいことがあったんでしょう。訊きやすい人だったのでしょう。

あの子は姉が一人いるだけで、兄をほしがっていましたが、親切に演技のことなんかを教えてくださいました峰岸さんを、ほんとうの兄のように思ったのではないのでしょうか。頼り甲斐のある兄、と。いいえ、年からいえば父親と言った方がいいかもしれません。

私自身、中学二年のころ、当時二十五、六歳の石浜朗に似た国語の先生に憧れて、「先生が私のお兄さまだったらいいのに」などと書いたことがあるくらいで、あの年頃の少女にはよくあることだと思います。

今年の一月に名古屋に帰って来た時、自分の出ているビデオを見ながら、「お母さん、初めの頃よりずいぶん上手になったでしょう。ここは前はこういうふうだったけれど、こういうふうになったのよ。峰岸さんって、とってもいい人で、いろいろアドバイスしてもらってるの」と、嬉しそうに話していました。

もし本当に、言われているような関係にあったとしたら、あの子は決してそういうふうには私に話さなかったと思います。

ですから、どうお詫びのしようもないのですが、このために再婚の予定が延びたりして、峰岸さんには本当にお気の毒という気持ちでいっぱいなのです。

あの日、四月八日、私は入院中の病院で、その報せを受けました。喘息や胃潰瘍の悪化で昨年八月から入院していたのです。途中、少し体の具合がよいときとか、佳代が帰ってきたときとかには家に帰ったりするくらいで、それほど深刻な病状でもなく、のんびりと静養していました。

その日、ちょうど近くの青少年公園でリクリエーションがあり、帰ってくると、「会社のほうへ電話してください」と言われました。会社の電話番号は知りません。それで家の方に電話を入れたのですが、何度かけても話し中でした。なかなか通じない。予感というのでしょうか、一瞬不安が胸をよぎりました。

そこへ先生が二人いらして、「面談室へ来てください」と呼ばれたのです。面談室で初めて知らされました。

「お嬢さんが自殺されました」

目の前の二人の先生の姿が、私の視界からかき消えました。目の前が暗くなるというのはこういうことなんだな、思考力を失った頭の片隅でそんなことを考えていました。

「下の娘ですか？」

なぜだかわかりませんが、ふっとそう思いました。後から考えると、ふだんの佳代と違っていた――佳代の死ぬ二日前に最後に合った時、そんなことがいくつかあったのでした。

二日前の四月六日、佳代は名古屋で公演があり、久しぶりにわが家に戻って来ました。佳代は家に帰ってくるといつもまっ先に自分の出た番組のビデオを見る。佳代の出た番組は主人が全部ビデオに撮っていました。それを見ながらあれこれ話をするのが常でしたのに、それをしません。後で聞くと姉も「ちょっと変だな」と感じたそうです。

アルバムを見せたときにこんなこともありました。佳代が姉に贈ってくれた振袖を仕立てに出して成人式に着て行った写真、卒業式に袴をはいた写真・・・・・・・・。

佳代は、「お姉ちゃん、お見合いの写真が出来てよかったね」「『ハイカラさんが通る』みたいだ」とハシャイでいました。ところが親子三人、私と主人と佳代の姉の三人が写っている一枚を見せたとき、佳代は何も言いませんでした。

昔の佳代なら、「ずるーい、わたしだけ除け者にして！」とか「ウェーン、わたしだけ除け者ダーイ！ブン」とか怒ってみせるのに、何も言わない。

きっと自分だけが家族から離れた遠い存在になってしまった、思い出のいっぱいあった自分の部屋で、自分だけが除け者にされたような孤独感を感じていたのかもしれない。それを、その場で感じ取ってやれなかった――母親としての無力感に苛まれます。

最初の報せを受けてから、どうやって家に帰り、東京に行き、そして通夜、葬儀……。何が何だかわからないうちに、すべてのことが済んでいました。数珠だけ持って新幹線に乗ったときのものすごい報道陣。絶え間ないフラッシュ。なぜ、私が、そこにいるのかさえ、わからなくなっていました。四日間、朝まで全然眠れませんでした。不思議なほど涙は出ませんでした。

新幹線の中でも、どうして死んだのだろう、どうやって死んだのか、そればかり考えていました。まさか飛び降り自殺だなんて、思いもしませんでした。

これは全く初めて書くことですが、佳代は中学二年のときに一度、自殺を図った、とまでは言えませんが、それに近いようなことがあったのです。親の私が言うのもなんですが、佳代は比較的成績が良く、先生方からも可愛がっていただいた、そのことで同級生たちとうまくいかなかったこともあったようです。

それとちょうどその頃、ニコンのフレッシュギャルに応募し、私や担任の先生が反対したことが重なったりして、佳代の気持ちが不安定になっていたのかもしれない。

私がPTAに出かけたあと、佳代はお昼に肉饅頭か何かを蒸して食べ、そのまま寝てしまった。ところが、ガスの元栓の具合が悪くてガスが洩れていたのです。

「途中で二オイに気づいて消した。だけどあのままでいたら自殺じゃなく、自然に死ねたのにね。だけどやっぱり死ねなかった」

そう佳代が言いました。「人間が怖い」とも。

ひょっとしたら、この子は自殺しようとしたんじゃないだろうか、母親の直感でそう思いました。

あのか、命というものの大切さを言いかせたはずなのに、結局、私は母親として佳代を守ってやるができなかった。佳代が一番必要だったときに傍に居てやるができなかった。距離が離れている間に、心も離れていたのではないか。――考えれば考えるほど悔まれるばかりでした。

変わり果てた佳代と対面したのは四谷警察署でした。佳代の顔は包帯でグルグル巻きに全部覆われていました。ただ、口許のところが巻かれていなくて、その口許を一目見て、私はすぐに佳代だとわかりました。それは小さいころから見なれた佳代の寝顔の口許そのままでした。ちょっとすぼめたような、恥ずかしがっているような。佳代と呼びかければ、すぐにいつもの明るい声で「なーに、かあさん」と応えてくれそうな。

呼びかけたけれど、もちろん、返事が返ってくるはずもなかったのです。

お通夜の済んだ後、青山の新しく佳代が住むことになったマンションに行ってみました。まだあまり片づいていないままでした。見慣れた佳代の字で「YUKIKO NO HEYA」と書いた板が置いてありました。自分できれいに色を塗り分けて、それはいかにも佳代らしいものでした。寸法も全部、自分で測って作っていたそうです。時計の取り付けも自分でやったと聞きました。

幼稚園のころから工作や組み立てが大好きな子で、「誕生日のプレゼント何がほしい？」と聞くと、「大工道具のセット」と、まるで男の子みたいに答えていたのが、昨日のように思い出されました。

部屋には新しい生活用品、マイペットとかゴキブリの薬とか、トイレット・ペーパーなども沢山買ってありました。全部そろっている。それに六日に名古屋に戻ったとき、佳代は親しいお友だちに、この部屋の新しい電話番号を教えているのです。

もし佳代が前から自殺を考えていたとしたら、そうはしなかったのではないのでしょうか。

それでは何が自殺の原因なのか？ と問われると母親として悲しいことですが、まったくわからないというのが本当のところです。

名古屋に来たときに、中学、高校時代のたくさんの友だちと会いました。皆、いい大学に入ったりしている。そういう方たちを見てふっと寂しさを感じたのかもしれない。自分で好きで選んだ道ではあったけれど、きっと辛いことも多かったのでしょう。日記にも最初のころは「頑張るぞ」とか書いていたのが、途中では「どうしてこんな世界を選んだのだろう」と悩みのようなことを書きつけていますから。

それと佳代の性格。本当を言うと、佳代の性格は芸能界には向いていなかったのかもしれない。集中するときは大人以上に集中力があるけれど、あと、幼稚園児みたいに抜けたところがある。時間に追われ、キチッとスケジュールを決められて動く世界で、佳代は息抜きが出来なかったのかもしれない。

マネージャーの方にも言われたことがありました。テレビに出ているとき、聖子ちゃんなんかは自分が写ろうと思ってサッと前に出て行く。ところが佳代は、先輩を立てて後ろへ下がってしまう。マネージャーが「ふだんは先輩を立てなきゃいけないけど、テレビに出たら同格だから、先輩も後輩もない。パッと写るところへ行きなさい」と、いくら言っても後ろへ下がると注意されました。

七時に家に帰り、八時五十三分の新幹線で東京に戻ったのですから、家にいたのはほんのわずかでした。

帰り際に、これも後から考えて思い当たるような気もするのですが、佳代は気になることを言いました。

「お父さんかお母さんが一人東京に来たほうがいいみたい。私は好きでやってるからいいんだけど、やっぱりお父さんかお母さんが出て来たほうが、お金もらえるみたい」

今まで、そんなこと一度も言ったことのない子でした。そういう形で、自分の寂しさを訴えたかったのではないかと、ほんとうに悔やまれます。

翌日はオフで、映画『ロッキー4』の試写を見に行くと言っていました。オフだったのだから、一日でも一緒に居てやればよかった。そうすれば――。 残念でなりません。

名古屋駅で八時五十三分の東京行新幹線を見送った――それが佳代との永遠の別れになりました。

私と主人が結婚したのは昭和三十七年の二月です。四十年に長女が生まれ、その二年後、昭和四十二年に佳代が生まれました。辺縁性胎盤という異常出産で、あとで聞くと、ふつうは帝王切開をするのだそうですが、陣痛の起こる注射打って、切開せずに生まれました。未熟児で体重は二千七百グラム。身長四十七センチしかありませんでした。三歳児検診のときに、「よくまあ無事に生まれましたね。ふつうなら死産か障害児として生まれるケースです」と先生に驚かれ、かえって私の方がびっくりしたくらいです。

「佳代」という名は主人がつけました。姉が「千佳」というので、なにかしりとりみたいですね、と主人と笑い合ってから、まだ十数年しか経っていないのです。未熟児として生まれたけれど、とても手のかからない子でした。親の私が言うのもおこがましいのですが、なかなか利口な頑張り屋、意地っ張りな子でした。頑固なところもそのころからのことでした。

二歳何カ月ごろのことです。主人が日曜日にどこかに連れて行ってやろうと約束をされていて、引越し疲れなども出たために、急に取り止めにしたことがありました。さあ、そうになると佳代はもう、ものすごくやんちゃをいう。

「約束だったんだから連れてって」

と言って、絶対に譲りません。主人も閉口しまして、じゃ、うなぎか何か食べに行こうということになった。そうすると、佳代はもう怒って、自分には行かないと言うんです。

これにはさすがに主人も腹を立てまして、佳代だけポイと置いて三人で食事に行ってしまうました。そういうときでも、佳代は絶対に泣かない子でした。

すばしこくて、何か悪いことをして、叱って押入に入れようとする、その前に自分で押入に入ってしまう。いつも出すのに苦労しました。

負けん気が強くて、姉とも堂々とケンカする。そして負けると「私は小さいんだから」。勝てば「私、お姉ちゃんに勝ったよ」。シッカリしていました。

姉が幼稚園のころ、いつも佳代を連れて送りに行っていたんですが、佳代は帰りたがらないのです。「お姉ちゃんと一緒にいたい」と言って、姉と一緒に姉の嫌いな給食まで食べてくる。姉は残すんですが、佳代はお代わりまでする。

ところが小学校に入ると佳代も給食が嫌いになって、そうなる「給食は嫌いだ」などという詩を作って発表したり。とくにカレーうどんが嫌いだったようなんですが、先生のところまで行って「こんなヘンなもの、よう食べん」とにかく徹底していました。幼稚園の年少組のとき、鉄棒で逆上がりができなかったんです。そうしたら、裏庭に祖父が作った鉄棒があったんですが、幼稚園から帰

ると暗くなるまでそこで練習する。とうとう出来るようになりました。その根性には親の私が呆れたほどでした。

後年、芸能界へ進みたいと言い出したときのあの頑張りも、この頃からのものだったわけです。

小さい頃から絵は大好きでした。本格的に習い始めたのは四年生のときです。そのときに佳代は私にこんなことを言いました。

「一年経ったら、才能があるかどうか先生に聞いてみて。もし才能があると言われたら芸大へ行きたいから」

五年生になってのゴールデンウィークには熱田神宮、名古屋城、犬山のモンキーセンター、そこらじゅうに写生に行きました。二人で行くんですが、絵について何か言うと佳代が怒るので、私は傍で本を読むことにしていました。

描き出すともう夢中で、暗くなるギリギリまで描いている。「もう時間ギリギリだがね。早く描かないかんがね」「うるさい」。そんなやりとりも今は懐かしく思い出されます。

教育委員会賞、宮司賞（熱田神宮の）など、いくつも賞をいただきました。

中学に入っても絵は続けていましたが、そのころには芸能界への関心も強くなっており、将来、絵の方へ進むか、芸能界へ進むか、悩んでもいたようです。

そのころ、中学に通う佳代を思いつつ、私が詠んだ歌があります。

新たなる希望を胸に秘めし子等
応える手にも若さあふれて
制服の衿の白さよ少女子の
清き心に幸多かれと

中学に入ってセーラー服を着ることをあんなに喜んでいた佳代。ほんとうに、あのころの佳代のセーラー服の衿の白さが、今でも目に浮かんでくるのです。

佳代が芸能界へ目を向け始めたのは、中学校三年生の頃でした。姉の千佳が読んでいた『高一時代』にニコンのフレッシュギャルの募集広告が載っており、軽い気持ちで受けてみたら準グランプリになりました。そして三年の夏休みにグアム旅行に行かせてもらったのです。二年時の担任の先生からは「もうこれが最後、二学期からは受験勉強に入らなければいけない」と釘を刺されていましたし、私もそのつもりでした。

ところが夏休みの最後に一枚のハガキが舞い込んで来たことで、佳代の運命が大きく変わったのです。

ハガキは中京テレビからのもので、「スター誕生」の地区予選を知らせるものでした。佳代はこれにも受かってしまいました。私は内心は困ったことになったと思いましたが、まあ地区予選だからと軽く考えていました。

日本テレビから、特別番組で撮りたいから十二月五日に親子で東京へ来てほしいと連絡があったのは、それからしばらくたってからでした。

担任の先生はもちろん反対、私も佳代を芸能界に入れたくはありません。主人もちろん反対。家中が反対でした。教育者だった義父からは「あんた、どういう教育してる」とものすごく叱られてしまいました。

けれど、いくら説得しても佳代は引き下がりません。そういう点は子供のころから頑固でした。ハンガーストライキまがいのことまでし、先生が話をしても聞かない。学校で歌の練習のときに泣いていたなどと聞いて、私の決心もグラつきがちでした。ある朝、テレビの上に「お母さんへ」という佳代の手紙が置いてありました。佳代はその手紙で、自分が芸能界に行きたいということを切々と訴えていたのです。

姉と相談した私は、芸能界へ行くについて、佳代にとても出来ないだろうと思われる三つの条件を出しました。

- 一、学内テストで学年一番になること
- 一、中部統一テストで学内五番以内になること
- 一、志望高校に受かること

私も主人も、まさかこの三条件を佳代がクリアできるとは考えてもいませんでした。それから、私も主人もあきらめるような佳代の頑張りが始まりました。自分から冬休みのゼミに参加し、問題集を買って遅くまで勉強する夜が続きました。今度は佳代の体が心配になります。早く寝るように口を酸っぱくしても、頑として聞こうとしませんでした。

三学期に入って間もなく、「学内テストで一番になった」と喜んで帰って来たとき、私は正直に言って、負けた、もうだめだ、と思いました。もう芸能界に進もうという佳代の決心を覆すことはできない、そうあきらめたのでした。

佳代はほんとうは歌手より女優になりたかったのです。十二月のある日、学校での進学三者会談の帰り、佳代とこんな話をしたことを覚えています。

「佳代ちゃん、あなた女優になりたいんですよ。それなら高校を出て大学の演劇科か何かに入って、卒業してから文学座とかを受けてもいいんじゃないの」

「それじゃ遅すぎるの。せっかくチャンスがあるんだから挑戦したい。それに私、今の学校教育、行けばよけいバカになるような気がするの。学校は今でなくてもいい。ほんとうに勉強がしたくなったとき学校へいく」

結局、佳代は私たちの出した条件を三つともやり遂げてしまったのです。

高校は向陽高校に合格しました。

三月三十日には「スター誕生」の全国大会が後樂園であり、姉と二人で東京へ行きました。もう私にも主人にも、佳代を止めることはできませんでした。

高校生活もサッカー部に入り、マネージャーの仕事をさせていただいたりして、それなりに楽しんでいました。「やっぱり中学とは違うよ。授業が面白い」と言うのを聞いて、もしかしたらと思わないでもありませんでしたが、芸能界に進みたいという佳代の決心はとうとう変わりませんでした。

サンミュージックのお世話になり、二学期から東京の堀越学園へ編入することになりました。一学期の終了日、クラスの皆さんに送別会を開いていただき、佳代は泣きじゃくりながら「セーラー服と機関銃」を歌ったそうです。

今から考えると、わずか一学期だけでしたけれど、この向陽高校の時代は佳代にとって一番楽しい時代だったのではないかと思われてなりません。

その年の夏休みは本当に短かった。佳代は発声練習をしたり、朗読のテープを買ってきて研究したり。腹筋運動も欠かさずやっていて、親から見てもこの子は頑張り屋だなあと感心したくらいです。

その合い間には、祖父、祖母と食事に行ったり、小学校の竹内先生やお友達とお茶会を開いたり、サッカー部の応援に行ったり――佳代にとって最後の「夏休み」でした。

東京へ行く準備は全部自分でさせました。住民登録を移すのも、荷作りも、全部自分でやりました。これからは一人で東京で生きて行かなければならない。甘えは許されない。本人もそれは自覚していたようです。

八月二十五日、佳代は東京へ旅立ちました。私、主人、祖父母に別れを告げるとき、佳代はやはり、少し寂しそうに見えました。「一学期に一度でいいから、手紙たのむよ」祖父との約束も、結局、守れませんでした。名古屋の駅には高校の友人たちがたくさん見送りに来てくれました。高校生活を打ち切り、友人たちと別れる寂しさで、佳代の心は揺れていました。

翌日、佳代から電話がありました。そして電話のあとすぐに書いた手紙が、東京の佳代から届いた最初の手紙でした。

パパ、ママ、お姉ちゃんへ

Hello! お元気ですか?

な～んて、ついさっきTELしたばっかなのですヨ。実は・・・私は元気です。

部屋は19歳の岡島昌美さんと同室です。昨日は大映の面接(?)がありました。桑田靖子さん(池田咲恵子さん)にも会いました。本当に明るくてやさしそうな子です。

私は今日(26日)から大本恭敬先生のところに行きます。そして明日からはダンスのレッスンだそうです。レオタードは今日、買ってもらえるみたい。

あ！ お母さん、やっぱダンスとか、たなはいらないヨ！ 部屋にありました。机も学校があるということで、私が使わせてもらってます。

初めての東京の生活、望んでいた芸能界への一步を踏み出した佳代の興奮と喜びが直かに伝わってくるような手紙で、佳代が残してくれたたくさんの作文や絵とともに、今の私にとっては何よりも大切な宝です。

デビューは八四年の四月二十一日。

「デビュー曲は竹内まりやさんが書いてくださるのよ。奈保子さんも書いていただいているの」
喜んで話した佳代。

私が、「でも、ヘタだったら買って上げないよ。七百円なんて高いから」とからかうと、「キビシーイ親」と笑っていた佳代。

それからはもう、順調すぎるほど順調でした。ラジオのレギュラーも二本持ち、多くの新人賞もいただきました。写真集も何冊か出していただいた。各地のコンサートも満員でした。何かあるとファンの方からの励ましの電話が、家にもよくかかってくるようになりました。

けれど私の心では、なんとなく不安というか胸騒ぎがしていたのも事実なのです。

昨年の夏、和歌山でのコンサートが終わったとき、

「今、終わった。早くおうちに帰りたい。三日前に倒れて点滴打ったばかりだけど、券が売れてるからしかたないの」

と、電話をしてきました。弱音を吐いたことのない佳代が初めて吐いた弱音でした。

そして、公演の合い間に家に寄っていくときの慌ただしさ。夜九時ごろ来て夜中の三時に出て行ったこともありました。ドラマがあると徹夜になるし、睡眠時間は連日三、四時間。あんな生活にはとてもついていけない――家族全員がそう思ったような生活に、十八歳の佳代は、必死に耐えていたのでしょう。

南青山の電気の点いていない暗い部屋に戻ったとき、一瞬でも寂しさを感じないはずがなかった。

そして――ある日突然、耐え切れなくなった――

佳代が死んでから、もう四カ月が経ちました。私の方は相変わらず病院に出たり入ったりの日ですが、佳代のことを思わない日は一日もありません。病院にいるときも、家でも、朝、昼、晩、三回のお経は欠かしたことがありません。無意識に避けているのでしょうか、主人とは佳代の話はほとんどしません。

ファンの方からは、たくさんの手紙をいただきました。若い男の子たちが、たどたどしい文章で佳代のことを書いてきてくれます。そんなとき、ああ、佳代はまだファンの方たちの心の中に生きているのだなと思います。

八月二十二日の誕生日――生きていれば佳代が十九歳になった日――その日も、たくさんのファンの方たちが、わざわざ自宅まで、お線香を上げに来てくださいました。

ほんとうに申し訳ないと思います。

佳代が死んだあと、後を追う形でたくさんのお子さんたちの自殺が続きました。人様のお子さんたちまで巻き込んでしまったことに対しては責任を感じて、申し訳ない思いで一杯です。ファンの方にはお願いします。生きて頑張ってくださいことを佳代も喜びます。

どうぞ命を大切にしてください。

最後の日々と一緒に生活していなかったせいでしょうか、いまだに、何かふっと佳代から電話があるような気がしてなりません。

佳代ちゃん、ごめんなさい。

まだわずか十八歳のあなたを、たった一人にした私が悪かったのです。

いつか佳代は言っていました。

「細く長い人生でなくてもいい。短い人生でもいいから、自分の思うことがしたい。お金がほしいから芸能界へ行くんじゃない。純粹に生きたいから、美を表現したいから芸能界へ行く」と。

また、こんなことを口にしたこともありました。

「お母さん諦めて。わたしは死んで生まれたかもしれなかったんでしょ。だったら、そのとき死んだと思って」

依怙地とも思われる頑固さで意地を通した佳代でした。やっと高校を卒業したばかりの若さで。まだまだこれからだったのに。できることなら私が代わってあげたかった。

芸能界に入ってすぐのころ、冗談に、「もし、あなたのことを書くことがあったら、お母さんが書いてあげるからね」と言ったら、佳代は笑ってこう言いました。

「お母さん、あたしのこと書くんなら、売れるのを書かなきゃだめだよ」

それが、こんな形で佳代のことを書くことになるなんて。

運命ほど残酷なものはありません。

佳代ちゃん

あなたの人生、ほんとうに短かった

ほんとうに忙し過ぎた

あなたの声、あなたの姿、忘れない
もう、ゆっくりお休みなさい